



ゲート

自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり

プラス

外伝⁺ 特地迷宮攻略編〈下〉

α L P H α L I G H T

柳内たくみ

Takumi Yanai

アルファライト文庫



主な登場人物

Main Characters



パ
レ
セ
ス
テ
イ

騎士団の第一隊長。
すれ違いが重なり
ピニャと対立してしまう。



ラ
ニ
ヤ
コ

帝国の第三皇女。
古典歌劇に影響され
12歳で騎士団を創設する。



伊
丹
耀
司

陸上自衛隊二等陸尉。
オタク趣味の持ち主。
資源探査の任務中。



ヴ
イ
フ
イ
テ
イ

騎士団の親衛隊長。
複雑な家庭環境で育つ。
男勝りで型破りな性格。



ハ
ミ
ル
ト
ン

騎士団の団長副官。
生真面目なしっかり者で、
ピニャからの信頼は厚い。



テ
ユ
カ
ル
ナ

エルフ上位種族の娘。
金髪碧眼でスタイル抜群。
弓の扱いに優れる。



ヤ
オ
・
ロ
ウ

妖艶なダークエルフ。
かなりの不幸体質。
伊丹との関係を思い悩む。



イ
グ
ル
ー

騎士団の第四隊長。
父は現役の帝国軍人。
将来有望な剣の腕前を持つ。



カ
ナ
シ
ユ
フ
レ

騎士団の第二隊長。
美男子のような外見の少女。
後輩の面倒見が良い。



マ
ウ
リ
イ
・
マ
ー
キ
ユ
リ

神エムロイに仕える巫神。
不老不死の身体に
黒いゴスロリ神官服を纏う。



レ
レ
イ
・
ナ

ヒト種の賢者、魔導師。
頭脳明晰で無表情な少女。
導師号取得を目指す。



ワ
ル
ド

文武に優れたグレイの戦友。
軍を追われ、助教として
騎士団に参加する。



グ
レ
イ
・
コ

兵卒上りの帝国騎士。
その経験と実力を買われ
騎士団の指導官となる。



く
ろ
か
ま
り

看護師の資格を有する自衛官。
第三偵察隊に配属される。
長身と美しい黒髪が特徴。



くり
は
し
し
の
栗
林
志
乃

小柄かつ巨乳の自衛官。
第三偵察隊に配属される。
格闘徽章持ちの猛者。

帝国の薔薇騎士団

グレイ・コ・アルド編

「兵士というのは、生まれてくるのではなく製造される。どれほどの優れた製品を作り上げるのが出来るかが、その国の力強さを決定することになる。それが我が帝国が、百人隊長を重く扱う所以である。精強な兵士を作り上げる職人たる彼らこそが帝国の背骨なのだ」

帝国第八代皇帝 ミード・ソル・アウグスタス

読者諸氏に置かれましては、ごきげんよう。

小官はグレイ・アルドと申す。帝国の軍人だ。

ちなみにグレイが名前で、アルドが家名である。普通この二つの間には、信じる神の頭名を入れるのが習慣となつている。だが、信心深い小官には、数多い神々の中から

特定の「柱」を選んで主と崇めるなんてことはとても出来ない。

戦場で生き残るには、その場その場で救いを差し伸べて下さる神々を正しく選んで信じ奉ることがコツだからだ。

とはいえ世の中は……特に出世してある地位にまで進むと、そんな主義主張を押し通してばかりもいられなくなる。やんごとなきお方達との付き合いが増えるにつれ「主神の頭名がないのはどうして？」などと問われたりするからだ。

それにいちいち答えるのははつきり言って面倒くさ……もとい、手間暇が掛かつてしまうので、小官も最近ではコモドーの頭名を名乗りに含めることにしている。主君に最後の最期まで尽くしたコモドー神に帰依するのは、宮仕えする者からすれば、忠誠心を大事にしていますとアピールするにはもってこいなのだ。

さて、小官について話そう。まずは何故、軍人という職業を選んだかだ。

どこにでもあるような貧しい農家の三男坊として生まれた小官は、実家の近くに駐屯していた軍団兵を見て兵士に憧れた。そして十四の時に家を飛び出して帝国軍の兵士に志願した。兵士になれば、少なくとも腹一杯飯を食うことが出来ると思つたのだ。

だが、見るのとやるのでは大違いだった。

兵士というのは思ったほど格好良くもないし、兵営生活も快適さとはほど遠い。苦勞

と苦痛ばかりが多く、ただひたすら堪え忍ばなければならない。

だが、堪えることに關しては、農家の三男坊ともなれば慣れたものだ。先輩や上官の横暴なんてものは、酔いどれた親爺の暴力や兄貴達の横暴とそれほど変わるものではない。

実家にいたんじゃあ堪え忍んだって銅貨一枚貰えないが、軍にいればソルダ銀貨を貰える。それだけで小官にとっては軍隊というところは天国のように感じられたのだ。

そうやって飛び込んだ軍隊の世界だが、あつという間に二十年が過ぎていた。

その間あちこちの戦争に行った。勝ったこともあれば負けたこともある。

惨めな敗走も、勝利の略奪も経験した。いろいろな上官に仕えて戦って、部下を持ち、指揮して運良く生き残り、気がついたら帝国軍の軍団首席百人隊長となっていた。

軍団首席百人隊長って地位がどれほどのものは、軍事組織に疎い者には分かり難いだろう。

簡単に言えば兵卒達の親分。その軍団にいる大勢の兵卒の中で一番偉いのだ。

もちろん將軍閣下や將校、士官様よりは下だが、そもそもあのお方達は兵卒じゃない。貴族出身の方達は兵卒のことなんて何にも分かってない。ただ後ろのほうにいて命令するだけの存在だ。

実際に戦うのは小官ら百人隊長。ぼんくら共に武器の使い方方を教え、規律を叩き込み、戦わせるのは小官達なのである。

従って百人隊長の首席ともなると、作戦会議で意見を述べる事が出来るようになる。將軍閣下から兵士達についての相談だって受ける。

そんなじよそこの成り立て士官様じゃあ、將軍閣下に口を利くどころかお目通りすることすら許されないのだから、そこだけとりあげても、首席百人隊長がどれほどの権威と実力を持っているかが理解してもらえらるだろう？

庶民出身の兵士にとつて、この地位こそが目指すべき出世の頂上なのだ。

もちろん制度的にはさらに上を目指すことも出来るが、それを狙うならコネやら後援者やらがそれなりに必要となる。己の運と実力だけを頼りに上って行くとしたらこいらが限界点、見えない天井のあるところなのだ。

小官も、言いたいことを言う性格が禍してお偉い方に親しまれてはいなかったから、まあこのあたりで良いかななんて見切りをつけていた。そう思っただけで見れば、百人隊長というのは案外と気楽な稼業に思えた。

兵卒相手に威張り散らしながら引退年齢まで勤め上げ、その後は平和な田舎に引っ込んでのんびり莊園でも経営する——それが小官の夢見る現実的な将来設計であった。

ところがだ。何の因果か、小官はそんな出世の姿なき天井を突き破った。

前の戦の折りに、たまたまお仕えした若い將軍閣下（その方の名譽のために仮のお名前をハブシュ將軍とお呼びすることにする）が、とにかく残念な方であった。将校や幕僚だった時は与えられた職務を無難にこなしておられたのに、順当に出世して將軍になった途端、弱点というか欠点というか短所が露呈した。

森林の小路を行軍中、蛮族に包囲されるという危機的な状況が発生したのだが、その大混乱の最中で、この方は自分の責任で次の対処を決断することが出来ずに、危うく軍団を全滅させかけたのだ。

「副官は!? 副軍団長は!?」

各隊から送り出された伝令が次々と集まってくる中、ハブシュ閣下が情けないまでに泣きそうな顔で叫んでいる。

「皆さん、敵と戦っておられます！ ハブシュ將軍、ご命令を！ ご指示を下さい！」

「うわああああ！ どうしたらいいんだ!」

その時の伝令達の表情を、一言で言い表す方法を小官は未だに思いつかない。

噂に聞く恐怖の戦神、ロウリイ・マーキュリーに戦場で出会え、良い感じに微笑まれた……と言えば伝わるだろうか？ みんな顔面蒼白となって、魂を奪われたような顔と

なっていた。

兵にとつて、自分の上官が何も決めることが出来ない根性なしだと分かった瞬間の恐怖は、それほどのもなのだ。

小官もその時、このままでは死んでしまうと思つたからついつい叫んでしまった。

「これより当軍団の指揮を小官が執る！ 伝令達は各隊に伝えよ！ 正面突破だ！」

こうして小官の軍団は、全面崩壊の危機を脱したのである。

正直言つて、この瞬間の決断は我ながら見事だつたと思う。上官を無視しての越権行為等々、様々な問題はあろうとも、そのおかげで小官も軍団の皆も生きている。そのことが小官にとつては密かな自慢となった。

そう「密かな」だ。

というのも、こういう功績に光が当たるとは、ほとんど、全く、絶対と言つて良いほどないからである。いったいどの將軍閣下が、自分の指揮ぶりがダメだつたなんてことを口外するだろうか。

従つて、この手のことはなかったことになるのが普通なのだ。

ところがしかしけれども、ハブシュ將軍は違つた。

元々親の命令でなりたくもないのに軍人になられた將軍閣下は、この失敗をきっかけ

に、権門の貴族だったという理由で順当に出世してきた我が身を顧みて、軍人稼業に見切りをつけ早期引退を決めてしまわれた。

そして自分がいかにダメダメであったかを社交界で大暴露。軍団が全滅せずに助かったのは小官のおかげだと吹聴ふいちようしてくれたのだ。

「グレイ。よくやってくれた。その褒美として卿には昇進を約束しよう」

おかげで小官は、騎士階級に引き上げられてしまった。つまり士官様である。

こうして小官は兵卒の親分という立場から、貴族の下つ端成りたて士官に成り下がってしまったのである。そう、それは傍目からは出世だが、小官にとってはトホホな出来事だったのである。

帝国騎士へと昇進したからには、粗野な兵卒なままではいられない。

宮廷に上がったたり、貴族階級出身の士官達と対等にお付き合いをする場面が増えたため、小官もこれまでと違った上等な仕立ての制服を身に纏い、行儀良く上品な立ち居振る舞いというものを身に付ける必要が出てきた。

今まではベテランとして兵士達に物を教え、命令しているだけで済んだのに、士官になったらそれまでの常識が全く通用しない。右も左も分からず、何もかもを一から勉強

し直さなければならなくなってしまったのだ。

特に苦勞したのが、宮廷にいる約半数のお方が女性だということ。

軍にも女はいることはいるが、あいつらが相手の場合は怒鳴りつけたり命令したりするだけで大抵のことは事足りる。

だが貴族様となると話が全く違う。たおやかな、触れ方を間違ったら壊れてしまう銀細工のようなお方達のお相手をするからには、これまでと違った気の遣い方をしなければならなかった。その氣遣いに、小官は非常に悪戦苦闘することとなったのだ。

おかげで小官もほとほと神経が参ってしまった。

いっそのこと軍を辞め田舎に引っ込んで、莊園生活でも始めようかと思ったくらいだ。宮廷で知り合った素朴な可愛いメイドと良い感じになってきたこともある。彼女なら小官の子供を産んでくれそうだから、彼女を嫁にして毎日のんびり過ごすのも悪くないと思うようになったのだ。

ところがある日、小官はハブシュ將軍……もとい、元將軍に呼ばれて宮廷に参上した。軍を退かれたハブシュ元將軍は、その後宮廷で皇帝陛下の相談役のような職務に就いておられる。相談役といっても公的な地位ではなく、私的な皇族の皆様方のお話し相手みたいなものだと思えば良いだろう。

「おおつ、グレイ首席！ 良く来てくれた」
トウガで身を包んだ閣下はすこぶる上機嫌じょうきげんそうだった。

軍営にいた時にはこんな明るい笑顔などんと見ることが出来なかったから、軍隊生活はよっぽど水が合わなかったに違いない。

この方にとつては、やはり軍を辞めることが正解だったのだと思う瞬間だった。

「ハブシュ閣下。お呼びでしょうか？」

「閣下はよしてくれ。私はもう軍人ではないのだからね」

「小官にとつては閣下は閣下、尊敬すべきお方です。大抵の人間は自分の短所というものを隠しますがりますが、閣下は決して目を背けようとなさらなかった」

「君のような古強者ふるつものにそのように言ってもらえて嬉しいよ」

皮肉というものが分からない方である。この素直さが人間として愛すべき美点であり、軍人としての欠点なのだ。

「どうだね、宮廷での生活には慣れたかね」

「兵営生活が懐かしいです」

「良くも悪くも軍隊という場所は単純だからね。貴族社会は複雑怪奇ふくざつかいきで面倒くさすぎる」

「そのご意見には、小官も大いに同意いたしますぞ。雲の上の方々がどんな思いをして

らつしやるかお陰様で理解できました」

「ふむ。君は私に軍隊というところがどういうものかを教えてくれた。だが今度は私が君に、宮廷とはどんなところかを教える番だね。なんだかそれはとつても気分が良い」
「まさかと思いますが、その気分の良さを味わうために小官をお引き立て下さったのでっ」

「もちろんだとも。君に怒鳴られ尻を叩かれながら、この野郎いつか復讐ふくしやうしてやると何度も思ったからね」

「どうぞお手柔らかに願いますぞ」

小官は恭まうしく宮廷儀礼の札をハブシュ閣下に行く。そしてしばしの間、二人で笑いあったのだった。

「さて、今日君に来てもらったのは、頼みたいことが一つあったからね」

「なんででしょう？」

「簡単に言えば……その、なんだ、つまりは、○○の……調練ちゆうれんだ」

「調練でありますか？」

どうしてハブシュ元將軍閣下が小官を呼び出してそんな要請を？ 兵を鍛えるなら普通に通に兵営に放り込めば良いだけのはずなのに。

そもそも〇〇って何だ？ よく聞き取れなかった。

その時、『貴族社会は複雑怪奇で面倒くさすぎる』——ほんの数刻前に閣下が口にされた言葉が脳内で再生されて、小官の背筋に怖じ気が走った。

「あの……そういうのは確か近衛兵このえへいの任務だと思うのですが？」

近衛兵は戦争に出る必要もなく、敗走や戦場での飢えを味わうこともないという、一般の兵士達が羨むような待遇を受けている。だが、その代償だいしょうというわけでもないのだから、お偉い方々に軍隊を格好良く指揮する快感を味わわせる、いわばおもちやの役を演じるというものが任務の中に（非公式に）含まれている。つまり、この手のことも彼らの役割なのだ。

「いや、近衛隊ではダメだ。なにしろ先様さきさま様は実戦経験が豊かな者をとお望みだからね。

かと言ってそこいらの百人隊長を引っぱってきて、あのお方のお相手をさせるわけにもいかないだろう？ だから君なんだ。君はもう皇帝陛下の藩屏はんぺいたる貴族社会の一員で、それでいて経験豊かな兵士でもあるし、そもそもあのお方からのお名指なさししでもあるし……」

「あの、閣下？ そもそもあのお方とはいったいどなた……？」

後々のことを考えてみれば、この時小官は質問などせずに、実は引退して結婚し、莊園暮らしをしようと思っていると告げるべきだったと思う。そうしておけばハブシュ閣

下も小官にこの仕事を押しつけようとは思わなかったはず。

つついそのお方の名を尋ねてしまったばかりに、小官は退却路たいせつろを自ら塞ふさいでしまったのだ。

「うん、名を聞くより実際に会ったほうが話が早いだろう。これよりその方に君を紹介しようと思うからついてきてくれたまえ」

「は、はっ！」

ハブシュ閣下の後について小官は宮廷の長い廊下ろうかを進んだ。

やがて、皇族の方々以外自由に立ち入ることが許されない区画にまで進んだところで、小官は初めて己が死地に踏み入っていることを悟った。

「あの、閣下？」

「君の言いたいことは分かっている。だが今は何も言わずについてきて欲しい」

「いや、でもしかし……」

もう少し早く気付くべきだった。今日のハブシュ閣下が、一度として小官と目を合わせようとなさらなかったことを。

閣下は、かつての復讐のためかそれとも何かもつと別の動機によるものか、小官が思い描いていた牧歌的ぼつかてきで平和な老後を、「あんた、実は小官のことを本気で恨うらんでおいで

「なのでは？　そうでしょ？」と尋ねたくなるほど労の多い人生へと、変貌へんぼうさせようと目論ろんんでおられたのである。

「皇宮の奥深くで小官を待っていたのは、十二歳の少女だった。」

燃えるような髪の綺麗な娘で、整った顔立ちは将来が非常に有望そうだ。

「待っていたぞ、グレイ・アルド。妾わらわはピニヤ・コ・ラーダだ。よしなに頼む」

小官はその名を聞いた瞬間、覚えてたの宮廷式礼法が頭から吹き飛んでいた。

「こともあろうにそのお方は皇帝陛下てんきよのご息女、皇女殿下の敬称で呼ばれる御仁ごじんだったからである。」

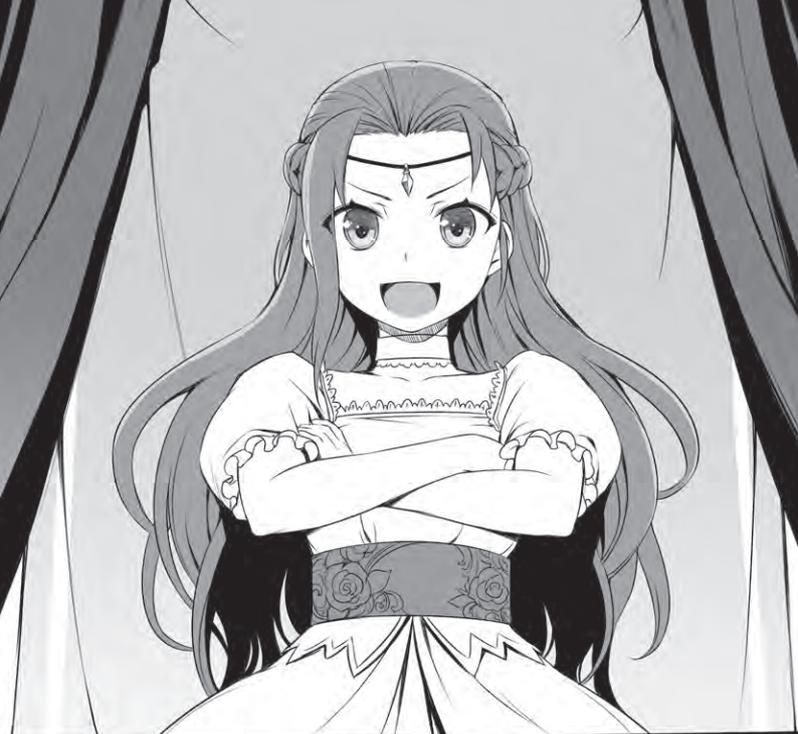
こんな慌てふためいた状況になると、人間は長年かけて身に付けたものが表れるらしい。地金じがねが表れるとでもいうべきか、小官は軍隊で長年やっていた、胸に拳こぶしを当てて前に突き出すという軍隊式の敬礼をしてしまった。

慌てて宮廷儀礼の片膝を床につけた礼に戻す。

「こ、皇女殿下におかれましてはご機嫌うるわしく……」

すると姫殿下は、それまで嬉しそうであった表情を不機嫌なものに変えた。

「ピニヤでよい。それと妾には、今後は軍隊式で頼む」



なんと姫殿下は、小官に名で呼ぶよう求めたのだ。

「いや、しかし小官のような立場で、殿下をご尊名そんめいでお呼び奉るわけには……」

「グレイ。貴様は何のためにここに呼ばれたか分かっておらぬのか？」

「兵の訓練をと伺うかがつております。して、小官が指揮する兵はいったいどちらに？」

小官はドキドキしながら問いかけた。

お願いだから、人形とかペットのリスを訓練しろなんて言わないで欲しい、と心の中で祈った。いや、後々のことを考えると、人形やペットの訓練だったらただ良かったかと思うのだが、当時の小官はそこまで頭が回らなかつたのだ。

皇女殿下は小官を真っ直ぐ見ながら言う。

「兵なら、貴様の目の前におるぞ」

その時小官は気付いた。ハブシュ閣下がもういなくなっていることに。

そう、逃げたのだ。

小官は思った。なんだ出来るではないか、と。

あの日あの時に、これだけの素早い判断が下せていればハブシュ閣下も軍人として名を残すことが出来たかも知れない。そう考えれば早期引退は実にもつたいなかった。

ま、世には自分のことだけなら決断の速い人間もいるし、逆に自分のことになるとて

んでダメな癖くせに、他人事になるとしつかりする人間もいるから、これだけで将才があると決め付けてしまうのも何なのだが、とにかくこの時の閣下は非常に素速く、しかも的確な判断をなさつたのだ。

そしてその分、後に残された小官は酷ひどいことになつたのだが。

「め、目の前と仰おほられても、小官に見えるのは姫殿下お一人……まさか姫殿下を？」

「そうだともグレイ。貴様を指導官として迎え入れる。妾を、一軍を指揮できるような将へと鍛えあげて欲しい」

それを聞いた瞬間、小官は目の前が真っ暗になつた。

兵とは凶事である。鋭利な刃物や先の尖とがつた道具と同じだ。子供のおもちゃにして良いものでは決してない。迂闊うかつに扱つかうと己ばかりか他人をも傷つける危ないものなのだ。

しかしながら時として国の枢奥すうおくにおられる方々の中に、そのことを忘れて弄もよほぶ方が現れる。

多くの人間を操あやつる爽快感さうかいかんに惹ひかれるのは致し方ないことだが、そこにいる兵が一人一人の人間であり、号令一つでそれが生きもすれば死すこともあるという恐ろしさを認識できないのだ。

小官はそれをある種の病やまなのではないかと思つている。そしてこの時小官は、姫殿下

もまたその類いではないかと思った。

だが、姫殿下がまだ年端もいかなない子供であることを考えると、そう決めつけるのは早い。姫殿下は、自分の思いつきが何を意味しているのか、誰からもその重大さを教えられていないのかも知れないのだ。

早急の教育が必要であった。そして今、この場に大人は小官しかない。

だから小官は、語りかけた。

「姫殿下は、何故に兵事を学ぼうとなさっているのですか？」

「女だからという理由で何もできぬのは嫌だからだ。帝国の安寧を願う気持ちは、妾は誰にも負けぬつもりだ。もちろん兵事に対する憧憬の気持ちがないとは言わぬが。だって格好良いである？」

その時の姫殿下の恥じらい含みの表情に小官は希望を見いだした。

この素直さには好感を抱ける。表向きの動機の陰に隠れがちな、裏の動機をちゃんと理解できているところも良かった。

口で勇ましいことを言ったり、あるいは天下国家について大言壮語を吐くような人間ほど、実は口にするのも恥ずかしい欲求を満たそうとして軍営の門を叩くのだから。

例えば小官の場合は腹一杯食べたい。その一心だった。

そして軍隊生活を長く続けられる人間は、得てしてそういうことを素直に追い求める人間だ。耳心地の良い言葉で周りを、そして何よりも自分をごまかしている人間は困難にぶつかると容易に折れてしまう。

ここまで聡い子なら叱つたり否定したりする必要はない。その心の内にある輝きをそのままに、より望ましい方向へと誘導すれば良い。

「正直なことで結構です。しかし帝国の安寧を望まれるならば、女性だからこそその戦い方があるとは思われませぬか？」

「女だからこそ……だと？」

「小官は、常々宮廷のご婦人方を見て、我ら兵士以上の強者だと思っております。口さがらない下々の者は、己の醜い嫉妬心から、貴族の方々を何の役にも立たぬ癖に美味い物を食らい、綺麗な服を着て苦勞を知らない連中……と罵ることがございます。しかしながら小官はそうは思いません。宮廷の女性貴族の方々は我々兵士と非常によく似た存在だと思います」

「どうしてだ？ 妾には貴様が何を申しているのか良く分からぬ」

「小官ら軍人は帝国のために力を捧げ、それをもって帝国は他国に睨みを利かせ、国内の治安を守っております。では振り返ってご婦人方はどうでしょう？ 帝国のためにそ

の美貌を捧げ、他国の権力者に嫁ぎ彼らの心を帝国の味方に引き留めたり、国内では有力貴族の間に閥閥を構成したりすることで、帝国の安定と発展に寄与なされている。小官ら軍人が群れをなし力尽くでせねばならぬことを、ご婦人方は己の身一つでなされるのです。どうして敬意を抱かずにおれましよう？」

「そ、そういうものなのか？ 妾はてつきり、贅沢をするのも華美な衣装で着飾るのも、虚栄心やら自己顕示欲やら物欲を満たそうとしているだけのように思っていたのだが。まさかそのような深慮遠謀があったとは……全く知らなんだ」

姫殿下はまるで初めて知ったとばかりの顔をなされた。やはり姫殿下には、それを教えてくれる者がいなかったのだ。

「才色の双方を兼備されたご婦人は、お一人で我ら軍人の一個大隊、否、一個軍団にも相当いたします。時と場合によつては、単独で国の命運を左右することさえもございませぬ。殿下の姉君たるラム皇女殿下がパルスティーヌ国に嫁がれたのも、その任務を果たされるため。そのように考えればご婦人方の立ち居振る舞いの稽古、花嫁修業と呼ばれるものの重要さや厳しさは、我ら古参の兵ですら顎を上げる過酷な戦闘訓練にも匹敵するのでは、と小官は愚考するのです」

「なるほど。イスラ姉様が妾に口うるさいのもそういう訳からか」

姫殿下は小官の言葉を嚙んで呑み込むように深々と頷かれた。それを見て小官は後一押しだと思った。

「小官が拝見しましたところ、姫殿下は既に希有な素質をお持ちだ」

「妾には素質があるのか？」

「はい。その素直なお心映えと美貌です。更に熱心に素質を磨き上げて行かれれば、いずれば皇帝陛下が、姫殿下をご婦人の戦場へと差し向けて下さるでしょう。その時にこそどうぞ帝国のために勇敢さを振り絞って下され。一山いくらの軍人の真似など、姫殿下がなされる必要は全くないのです」

うん、うまいことが言えた。

自画自賛になるが皆もそう思われるであろう？ 実際、小官の言葉は姫殿下の心に届いたようで、何度も何度も頷いておられた。これで姫殿下は、兵事を学びたいなどは二度と言うまいと小官は信じたのだ。

しかしながら姫殿下は不安そうな顔をなされた。

「妾は貴様の言うような、国に貢献できる者になれるだろうか？」

どうやら姫殿下は本気になって下さったようだ。本気になったからこそ自らの前途が不安になるのだ。小官は励ますように言った。

「姫殿下はお若い。今から励まればどうにでもなりますぞ」

「だが不安だ。グレイどうしたらいい？」

「ご安心ください。小官がついておりますぞ」

「貴様がか？」

「はい。どうぞ自信をお持ちください。このグレイ・アルド。女性を見る目に関しては右に出る者はないと自負しておりますれば。姫殿下がお困りの時、小官がきつと力になるとお約束しましょう」

「それは心強い。あい分かった！ 妾は貴様の言うとおりにしよう」

「お力になって何よりです」

小官はほつと胸をなで下ろした。

将来の社交界に花咲く大輪の紅花が、まだ蕾のうちに手折られてしまうことが防げたと、密かな満足感を覚えたほどだ。ハブシュ閣下から指揮権を奪い取って軍団の全滅を防いだ時と同じような誇らしさを小官は抱いた。

「いや、貴様の言葉で妾は蒙を啓かれた気分だ。今後は女としての戦い方も、漏れなく学ぶことにしよう。そして兵事もしつかりと学ぶ。グレイ、これからもよしなに頼むぞ」

「あ、えっ！ はい!?」

「いやあ貴様は凄い男だ。やつぱり貴様を選んで正解だった。そんな貴様の指導を受けられることになって妾は嬉しい」

姫殿下はそう仰りながら小官の肩を叩かれた。

もちろん小官は大混乱だ。

今、小官は諄々と婦人としての道を歩むことこそが、帝国のためになると姫殿下に説いたつもりで、姫殿下もそれを承服して下さったと思っただからだ。

なのにどうして、小官から兵事も学ぶことになっているのか。全く全然、話が不明。「しかし殿下、兵事と花嫁修業とは相反するものでして、下手をいたしますとどちらも中途半端ということに。それに小官が殿下の訓練を承るとは、まだ申しては……」

「何を言うか！ 貴様は今、妾を教育したばかりではないか。つまりは引き受けたということであろう？ それとも先ほど申した『力になると約束しよう』という言葉は嘘だつても？」

「そ、それは、でも、しか……」

「大丈夫だ。貴様が危惧するような中途半端ということにならぬよう、妾もがんばる！」「お待ち下さい。今のはその、大人として当然のことを申し上げただけでして……」

「いやあ引き受けてもらえて本当に良かった。貴様ほど我が騎士団の指導官に相応しい

男は他にいないからな」

「し、しかし小官にはご婦人の花嫁修業の指導なんて」

「大事な。その部分については専門家を招けば良いのだからな。どのようにするかは、追って打ち合わせることにしよう」

このままではなし崩し的に指導官を引き受けさせられてしまう。そうなることを恐れた小官は最終手段に打って出ることにした。

この姫殿下には絶対、受け入れることの出来ない条件を突きつけ、それを理由にこの話をぶち壊すことにしたのだ。

「姫殿下。指導官の役目、承る上で条件がございます」

「条件とはなんだ？」

「殿下にまず聞いて頂きたい逸話がございます」

「申すが良い」

小官は姫殿下に、軍学を志す者ならば誰もが知っている大昔の逸話を語った。

大昔とある国の市井に、軍学の草分けたる学者がいた。その学者に五万の軍勢を与えれば、おそらくは大陸を統一することも難しくはないだろうと評判されたほどだ。

時の国王は、その軍学者の評判を聞いて宮廷に招いた。

実際に会ってみて、評判の軍学者がどれほどのものか試したかったのだ。

ところが現れた軍学者は風采のぱっとしない老人で、密かに颯爽とした名將の登場を期待していた王はこれを見てがっかりした。そして学者の理論や軍学までも、評判倒れでたいしたことがないと決めつけてしまったのである。

早速軍学者と王の意見は対立した。

軍律を厳正なものにすればどのような弱兵も勇敢に戦い、火の中だろうと水の中だろうと進むようになる。これは是非か。

出来る出来ないという意見の応酬が、そのまま言うなら実際にやって見せる、良いでしようという売り言葉、買い言葉となつて、国王は軍学者に理論の実証を求めたのである。ただし国王が軍学者に宛がった兵は、彼の後宮に住む美姫達であった。

「規律を厳正にすれば、どのような者であっても火の中にも水の中にも突き進む勇敢な兵士となるのだろうか？ ならばその女達でも勇敢な兵士になるか、やってみせるが良い」

こうして軍学者は後宮の美姫達の訓練を始めたのである。

軍学者は女達を集めると軍律の大切さを説明し、手取り足取り武器の持ち方、号令が

出たらどのように動かなければならないかを教えた。けれど国王の枕頭に侍るような美姫達が、風采の上がらない老人の言葉を真面目に受け止めるはずがなく、女の軍隊はどれだけ丁寧^{ていねい}に教えてやっても、命令に従うどころかきちんと整列することすら出来なかつたのである。

こんなこと百人隊長の経験者に言わせれば当然だ。兵卒なんてのは怒鳴られ、小突かれてこそ軍律が身につき、分つてものをわきまえた一人前の兵士になれるのであり、ご丁寧^{ていねい}に優しく教えてやったり、説得したりしたって役に立つようなものにはならないからだ。

けれど、お偉い軍学者にはそれが分からなかつた。拳骨^{けんこつ}の効用も知らずに軍律を頭だけで理解していたせいで、ついに言うことを聞かない美姫の代表格の二人を、軍律に基づいて死刑にしなければならなくなつたのだ。

仲間の首が目の前で切り落とされて恐怖した美姫達は、それまでとはうってかわって規律正しい兵士に成長した。

しかし、お偉い軍学者はそんなことをする前に百人隊長を一人か二人、連れてくるべきだつたと思う。そうすれば国の宝とも言える美人の命をあたたら奪うことなく、彼女達に軍律つてものを教え込むことが出来たはずなのだ。

実際、この軍学者の最期は悲惨なものとなつた。

軍学者は誇らしげに鍛え上げた女の軍勢を国王に見せびらかしたが、自分の愛妾^{あいしやう}を殺されて恨まない男なんているはずがなく、国王の命令で殺されてしまつたのだ。

軍律を正しく執行しただけなのにそれが理由で指揮官が殺されたことで、その国の軍隊からは軍規が失われた。情実^{じやうじつ}人事がはびこつて、戦う度に軍は敗北し、最後には王国そのものが滅びてしまつたのである。

「グレイ。貴様はその逸話をういて妾に何を伝えたいのだ？」

姫殿下は訝^{いぶか}しげに小官に問いかけた。

「姫殿下であろうとも、一旦小官の指揮下に入つたら軍規にはきっちり従つてもらわねばならぬということです。時には拳骨^{けんこつ}に物を言わせることもありましょう。そのご承服^{しょうふく}を得られなければ、小官はこのお役目を承るわけにはまいりません。国を滅ぼすきっかけになりますからな」

「ふむ……そういうことか」

「たとえばご皇族であろうと決して遠慮いたしませんぞ」

小官はなるべく恐く見えるように姫殿下に凄む。すると姫殿下の瞳に明らかに怯えの